

## じんけん くらしの扉

淡路市人教：No. 55

### みんなでつながりを

淡路市岩屋子育て学習センター 福島 文

淡路市には子育て学習センターが、旧町ごとに5箇所あります。センターには子育て中の親とその子ども、子育ての支援をする方々が集まり、一緒に育児について話し合い、安心して楽しく毎日をご過ごしていただける心がけています。例えば、地域の和菓子屋さんや和菓子の作り方を教えていただいて、一緒に作りながら話をしたり、長い間地域でボランティアで絵本の読み聞かせをしてくださっている女性たちが、子どもたちに絵本を



読んでくださったり、その後にお母さんたちと世間話をしたりもします。年に何

度かは市全体の子育てセンターの参加者が集まってバス遠足やイベントで楽しく遊びます。また、保健師・栄養士・心理士の方たちと密に連絡を取り合うことで、子どもに関する事、その他の生活の中での不安や悩みを相談してもらい皆で共有して親自身も子育てを通して“親育ち”できる場所でもあります。

最近の幼い子どもたちが、自身の親から命を奪われる悲しい事件は後を絶ちません。核家族化や不安定な雇用の中で孤立していく親たちも被害者の一人です。そんな大人や子どもを増やさないためにも、地域で繋がって見守って行きたいと思えます。沢山の子育て中の方、協力していただける方のお越しをお待ちしております。



## 淡路市人権教育研究協議会 定期総会記念映画

文部科学省特別選定  
大塚典子・菅原由紀・渡辺真由美・藤田真由美

# 風は生きよという

存在を否定され、死ぬ自由を奪われ、それでもなお命を懸けて生きていく人々を救済する「ササナ」の存在を深く掘り下げていく。川口有美子 作家・日本ALS協会理事

追い風は、ときどき前から吹いてくる

人工呼吸器は呼吸を助ける道具です  
もしもあなたが、病気や障害のために身体を動かせなくなったとしたら、どんな人生を想像しますか？  
映画が映し出したのは、ふつうの街でふつうの生活を送る人びと。特別なことといえば、呼吸するための道具・人工呼吸器を使用しているくらい。淡々とその生活を映し出し、歩んできた人生を見つめた時、浮かんできたのは日常の尊さ。たくさんの支えが必要だからこそ、多くの人に出会い、自由に動くことができないからこそ、生きてあることに感謝する。じんわりとところどころを揺る、人と人が繋がる物語。  
もしもあなたに、思うように身体を動かさない、そんな日が来た時は思い出してほしいのです。映画の中を駆け抜けていた、風の音を。  
その風が包まれた人と人とが、支えあいながら生きていたということ。

そこから吹いてくる風が  
人と人とをめぐり合わせてくれます

在宅用の人工呼吸器が売れたのは1975年頃。1台200万円以上する呼吸器を自費で購入するなどして自宅へ持ち帰るしかなかった。在宅へ来るケースは稀であった。しかし1990年、医療福祉の高度化により、在宅から呼吸器をレンタルできるサービスが整備されたことで在宅生活への道が大きく開ける。  
そして「病院から在宅へ」という医療改革の流れの中、在宅人工呼吸器利用者は現在約2万人にまで増えている。(出典：厚労省平成26年社会医療診療行為別調査)

障害者が重ければ重いほど何のためにそこにいるのかが、言われるんだよね

存在を否定され、死ぬ自由を奪われ、それでもなお命を懸けて生きていく人々を救済する「ササナ」の存在を深く掘り下げていく。川口有美子 作家・日本ALS協会理事

〇お問合せ〇 「風は生きよという」上映実行委員会  
〒192-0046 東京都八王子市明神町4-11-11 シルクヒルズ大塚 1F (全国自立生活センター協議会内)  
TEL: 042-660-7747 FAX: 042-660-7746 Mail: kazewalkiyotouji@gmail.com 公式HP: http://www.kazewalkiyotouji.jp

動けなくなることで、見えてきたもの

# 風は生きよという

穴戸大裕 監督作品

呼吸器から吹く風に乗る、つながりあう人と人との物語

監督・撮影・編集・ナレーション：穴戸大裕 音楽：末森尚 監音：米山晴 アニメーション：稲田秀成 撮影協力：神奈川大学 宣伝協力：青森通達 宣伝デザイン：玉利公助 助成：公益財団法人キリン福祉財団 企画・制作：全国自立生活センター  
配給：「風は生きよという」上映実行委員会 2015年7月/81分 / ドキュメンタリー  
www.kazewalkiyotouji.jp